

報告要旨

「ロシアの狩猟 歴史・制度・文学」

中 堀 正 洋

ロシアにおける狩猟の歴史は古い。狩猟は、民衆にとって食肉を得るための手段であると同時に、貴族にとっては娯楽といった意味合いが強く、10世紀には既に狩猟が行われていたことが『原初年代記』からうかがえる。歴代の公や皇帝たちは、組織的に狩猟を行い、狩りを愛した。初期には罾、長槍、サーベルなどが用いられたが、14世紀以降、銃の普及にともない、鷹狩りとともに、猟銃をもちいた狩猟が一般的になっていく。16世紀には、タタールからもたらされたと言われる犬追い猟も行われるようになっていった。時代が下るにつれ、狩猟を行うには権利が必要となり、階層上の制限が設けられ、狩猟は基本的には皇帝や貴族だけに許された贅沢な娯楽となっていった。

現在では、狩猟は一部の特権階級だけの娯楽としてではなく、多くのロシア国民によって親しまれている。半自給自足の生活を送っている田舎の村々では、狩猟はいまでも毛皮や食肉を得るための生活の一部であり、重要な生業の一部となっている。現在の狩猟及び狩猟資源に関しては、13章72条から成るロシア連邦法第209号（2009年制定）によって厳しく管理されている。狩猟をするためには、外国人にとっては少々複雑だと思われるいくつかの許可、つまりハンティングチケット、捕獲許可証、猟銃許可証、狩猟許可証などを取得しなければならない。また、狩猟をするためには、各州、またその中での地域分けなどで、異なる猟期、対象動物、狩った動物に対する有料の許可などが細かく定められており、さらに猟の方法によってもそれらが異なるため、複雑なシステムが採用されている。ロシアの広大な森林の管理は容易ではないため、密猟の対象とされやすい希少動物の減少も懸念されている。2020年7月24日には、ロシア連邦天然資源環境省令第477号「狩猟規則の承認について」が制定され、2021年1月1日からロシア国内での狩猟に関する規則が改正されたことによって、動物の保護や安全な狩猟のため、狩猟者は従来よりも厳しく規制されることとなり、密漁に対する措置が講じられた。

このように、何世紀にもわたってロシア民衆のあいだで受け継がれてきた狩猟は、当然、文学界にも影響を与えることとなる。狩猟は作家の創作活動や自然科学者たちに大きな影響を与え続けてきたため、ロシアには狩猟をテーマにした作品、純粋な文学作品のみなら

ず、実用書の類を含めた一群の狩猟に関する作品が存在している。たとえば、鳥類学・狩猟学の大家セルゲイ・ブトゥルリンはロシアの鳥類一覧表を作成して狩猟に関する多くの著作を残し、19世紀の雑誌『自然』の編集出版者として名を馳せたレオニード・サバネーエフは『銃猟師と犬追い猟師のための便覧』(1877年)や『狩猟暦』(1892年)などを残した。文学界に目を向けると、劇作家アレクサンドル・オストロフスキーはウサージバのあったシェリコヴォで狩猟に熱中し、ウラジーミル・ギリャロフスキーは幼少期から祖父や父親とともに熊狩りをしたり、犬追い猟をしたりして、その魅力に引き込まれ、そうした経験を作品のなかに反映させてきた。自身が水兵として参加した日本海海戦に関する著作『ツシマ』で知られる作家のアレクセイ・ノヴィコフ＝プリボイも熱狂的に狩りを愛し、創作活動のあとの最高の休息は狩りをすることだと信じていた。とりわけ、19世紀の3人の作家、レフ・トルストイ、イワン・ツルゲーネフ、セルゲイ・アクサーコフは、狩猟をし、その経験を作品に投影、あるいは昇華した作家として有名である。トルストイは狩りをしているあいだは健康的に疲労し、知的創作活動から離れて適度な休息を得ることができたと言われている。ツルゲーネフは『獵人日記』(1852年)を、アクサーコフは『オレンブルグ県の銃猟家の記録』(1852年)を上梓している。特に、アクサーコフは釣りや狩猟に精通し、自然をこよなく愛していた。熱烈に狩猟に打ち込み、日記には狩猟で撃った弾数や仕留めた獲物の数を年間で記録していたことも分かっており、相当な狩猟の腕前の持ち主だったことがうかがえる。ゴーゴリやツルゲーネフはアクサーコフを高く評価しており、『オレンブルグ県の銃猟家の記録』は文学作品としてだけでなく、実用書としてハンターたちの教科書にもなっていた。

ロシアにおける狩猟は、現在でも民衆の生活の糧であり、毛皮や食肉によって収益を生み出す重要な産業のひとつである。ロシア人にとって、狩猟は多面的な性格をもち、物質文化の側面を有した重要な伝統的精神文化・民衆文化といえるだろう。以上、狩猟に関する多数の図版を示しながら報告を行った。